

全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会(1968~1977)の研究(7) —「能登駅伝を語る」シンポジウム(2017)記録—

A Historical Study of the Noto Peninsula Ekiden for Selected Japanese Universities during 1968- 1977, Part 7 —Records of Symposium, 2017—

大久保 英 哲 (人間科学部スポーツ学科特任教授)

Hideaki OKUBO (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Specially-appointed Professor)

親 谷 均 二 (人間科学部スポーツ学科非常勤講師)

Kinji OYATANI (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Part-time Lecturer)

櫻 井 貴 志 (人間科学部スポーツ学科教授)

Takashi SAKURAI (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Professor)

西 村 貴 之 (人間科学部スポーツ学科准教授)

Takayuki NISHIMURA (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Associate Professor)

阿 羅 功 也 (人間科学部スポーツ学科助手)

Koya ARA (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Teaching Associate)

佐々木 達 也 (城西大学経営学部准教授)

Tatsuya SASAKI (Faculty of Business, Josai University, Associate Professor)

〈要旨〉

第1回開催(1968)から第10回大会(1977)まで行われた「全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会」(「能登駅伝」)は、かつて日本大学三大駅伝と言われた大会のひとつであった。筆者らは、この日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程を明らかにすることを目的に、第1回開催(1968)から第10回大会(1977)までの各大会のレース概要とチーム、選手、区間ごとの競技記録等をまとめた。本稿では、2017年11月に開催された本大会に選手、役員として参加してきた関係者によるシンポジウムの模様を収録する。大会関係者の記憶に基づいた証言が、大会の実態の一面を語るからである。

〈キーワード〉

能登駅伝, 駅伝競走, シンポジウム記録

1. はじめに：シンポジウム

2017年11月23日(木・祝)、ホテル金沢にてシンポジウム「能登駅伝を語る」が開催された。第1回大会開催から50年を期に、能登駅伝の歴史、そして後世に残した功績を明らかにしようとする試みであった。



写真1 能登駅伝シンポジウムポスター
(阿羅功也作成)



写真2 能登駅伝シンポジウム予告記事
(読売新聞 2017年11月21日)

シンポジストには、大学教員として大会運営に携わった宮口明義氏（元金沢経済大学，現：金沢星稜大学，教授），学生競技役員を経て，卒業後は大学教員として大会運営を支えた東木美恵氏（元金沢工業大学教授），ランナーとして大会に参加した平塚光明氏（金沢大学OB），同じく草間進氏（金沢工業大学OB），学生競技役員であった宮脇登氏（金沢経済大学OB）の5名が登壇した。



写真3 シンポジスト登壇者

一同は、当時を懐かしむとともに、それぞれの視点からさまざまな能登駅伝を語った。

司会は親谷均二氏（金沢星稜大学非常勤講師）が務めた。司会の親谷氏は、金沢大学在学中は選手として、その後北信越チームの監督を務めた経験から、シンポジストだけでなく、フロアに集った多くの関係者からも「現場を知る生の声」を引き出した。一同は、当時を懐かしみつつ、それぞれの視点から様々に能登駅伝を語ってくれた。



写真4 親谷均二氏（司会）

2. 大会の特色

(1) 能登半島国定公園記念大会

昭和43（1968）年5月1日，能登半島が国定公園に指定された。能登駅伝はこれを記念して七尾市観光協会など関連市町村が主催・主管したイベントの一つであった。



写真5 宮口明義氏

宮口氏は「第1回の大会は招待大会ということで，選手も監督も全部招待をするところから始まりました。大卒初任給が2万4000円の時代に，総経費が約270

万円。現在の価値に計算すると約2千万円。学生たちがよく頑張ってくれた。よくそのようなことができたと思います」と当時をふりかえった。

しかし第1回大会，第2回大会を主管していた七尾市観光協会などが第3回大会から外れ，その後学生中心の運営体制が強化されていく。

(2) 手づくりの大会

能登駅伝を語るキーワードの一つとして，「手づくりの大会」がある。当時大学教員就任1年目であった東木氏は「（必要関係）書類の書き方すら分かりませんでしたので，一生懸命，学生諸君と一緒に勉強しながら始めたというのが，能登駅伝のスタートでした」。そして，



写真6 東木美恵氏

「何でも学生諸君と頭をつつき合って工夫しながら進めていきました。皆で一生懸命、協議をしながら大会を盛り上げていったことだけが、私たちの自慢でした」と教員と学生との二人三脚での手さぐり運営をふりかえった。

一方で、自衛隊への協力要請がかなわず、学生がレンタカーを運転して、自衛隊のジープ（伴走車）の代わりを務めたこと、そして、招待大会ということで、「交通費も宿泊費も全部、大会持ち。経済的余裕がなく、一円でも安く、いい宿泊先、一円でも安い移動手段を考えた」という厳しい運営事情も明かした。

当時はコピー、ファクスもなく、大会運営資料はガリ版印刷。ましてやスマートフォンや携帯電話もなく、無線免許を取得して連絡係を担った学生もいた時代。現在からは想像できないほどの過酷な環境の中であって、大会運営を支えた関係者の苦労は並大抵のものではなかったであろう。

（3）厳しいコース

能登駅伝はランナーにとっても、コース・気候条件など非常に厳しい大会であった。草間氏は「箱根が何だ、全日本（伊勢）が何だ、出雲が何だと思うくらい、日本一過酷でつらくて長い3日間だった」と語る。



写真7 草間進氏

私は1区を走ることが多かったので、朝3時ぐらいに起きて真っ暗の中でアップをするときは、雨が降っているのが普通の状態でした」と過酷なレースの様子を紹介した。

（4）生涯走り続けるランナー

能登駅伝の厳しさは出走ランナーのその後の陸上人生にも大きな影響を与えていた。「私にとっての能登駅伝は陸上人生の原点です。それ以後、50年間で10レースほど走りました。自然と一緒に走って走る能登駅伝で『雨を喜び、風を楽しむ』という駅伝の醍醐味を教えてください、いまだに雨の日は呼吸が楽だ、風が吹けばこの



写真8 平塚光明氏

ように走ればいいというように楽しませていただいています」と平塚氏は言う。

（5）学生競技役員の役割と苦労

学生競技役員たちはどのような役割を担っていたのだろうか。当時を知るメンバーは語る。



写真9 宮脇登氏

宮脇氏によれば、「1回生の時はコース係として、一生懸命ラインカーで石灰をまいたことが頭をよぎっています。3

回生の時、宿の手配の関係で、金沢大学の女性の方と一緒に、事前に一軒一軒宿を回って、お願いと説明に回りました」と、多様な役割を学生たちが担っていたことがわかる。また、「コースの変更や見直しなども学生が行っていた」と宮脇氏は言う。

女子学生も特別な役割をいくつか担っていた。堀氏（一般来場者）によれば、各大学名を記したのぼり旗は手づくりで、文字はペンキで手書きだったという。また、末平氏（一般来場者）は、「旗、たすき、のぼり旗といった布関係は、女子学生が横安江町の間屋街で安い生地を探し、12色調達し、ミシンを掛けて作成した。あと1キロ、中継点といった看板やプラカード等は、陸上協会が手づくりで準備をしていた」。

大会記録やコースなどの資料作成・印刷も一苦労であった。当時はまだ、ガリ版刷であった。学生競技役員は、大会記録を手書きで計算し、鉄筆でバラフィンに書き、夜宿舎に着いたらガリ版刷という作業工程であった。翌日の監督会議までには資料を出さないといけなかったため、着いたらすぐにガリ版で印刷し、ホチキスで留めて、監督会議までに出すという時間との闘いでもあった。当時を知る宮脇氏は「この作業は今の学生にできるかどうか、不安です」と当時の苦労を語った。



写真10 末平万紀子氏

末平氏（一般来場者）は、3日間の大会運営期間中の学生競技役員の動きを話してくれた。車で中継点に立ち寄り記録をもらう。そして次の中継点までの移動

車内で集計結果を書き付けていく。すべての中継点を回った後、宿泊所に到着。集計結果は、事前準備した記録用紙にガリ版刷で入れていく。一刻も早く資料を完成させなければならず、ガリ版で数字を入れた後、輪転機を回し、監督会議の資料を作る。資料を作った後は、その日の関係者の宿へ宿泊費を払いに行く。時間帯は夜9時、10時になっている。選手達は翌朝のスタートに備え、すでに寝入っている。学生競技役員たちは、資料作成などのため、その時間にならないと宿に行くことができない。かといって翌朝支払いに回る暇もないため、真っ暗な中、「すみません、お金を持ってきました。幾らですか」「間違いないですか」といったやり取りをしながら宿泊費の精算を行っていた。過酷なスケジュールの中、作業にミスも起こる。しかし、末平氏によれば「どんなミスもあってはいけないのですが、結構、字が違っていただとか、ここが違っていただと言われると、本当に悲しい思いをしながらも、正確さ、速さを考えながら資料を作りました」と苦労の様子を語った。

宿泊費精算のため夜遅くに宿を回ると、旅館でも民宿でもクレームはなく、「そういう対応をしてくださる能登の方々の温かさに触れながら、3日間、回っていきました」と末平氏はいう。

選手役員の旅館、民宿の手配も学生たちが行っていた。7月、8月あたりから、能登半島を回り、各中継点周辺の宿泊所で「これだけしかお金出せないですが、泊めてもらえますかという形で交渉をし、なおかつ、それにおにぎりを2個付けてくださいとお願いしていた。それでも本当に温かく迎え入れてもらえた」と末平氏は言う。

旅館、民宿の手配で能登半島を回る際、同時に、道中通過する自治体には補助金をお願いし、道路に面している商店や、看板を見つけるとどこにでも入っていき、「広告お願いします」と協賛金を依頼したという。

このように多くの役割を担った学生競技役員たちのモチベーションの源となっていたのは、教員達の駅伝成功にかける強い思いだった。末平氏は、「宮口先生の（駅伝にかける）思いに応えたいというのが、私達学生の思いだった。そして宮口先生の思いに応えようと、東木先生が必死で、私達に準備の指示をしてくださる。それに応えることが学生の仕事だったような気がする」と当時の胸の内を明かした。

学生競技役員としての業務は過酷ではあった。一方で、業務を行うことで、従事する学生達は多くのスキルを身に着けた。末平氏は一連の作業を通じて「文章の書き方、あいさつの仕方、いろいろな交渉の仕方、手続きの仕方とい

うのを学生の間に身に付けておくことができたような気がします」と語る。さらに大学を卒業してから教員となった末平氏は「要項をつくれとか、案内状を出せといったというときには、意外と私はすんなりできました」と学生競技役員として鍛えられたことが、社会人になってからも生かされていると話した。

3. 能登駅伝がもたらした成果

(1) ランナーを育んだ大会

全国から多くの強豪校が招待された能登駅伝。地元北信越学連のランナー達にとっては格好の競技力強化の契機となっていた。山本氏（一般来場者）は「日体



写真11 山本進氏

大とか大東文化大がちょうど全盛期の頃でした。よく『月刊陸上』とか、世に出ている選手が目の前にいるというの



写真12 山本太一氏

だろう。同じ宿舎に泊まっても、ご飯を食べる様子、ビールを飲む様子、僕らもビールを飲んでいいのだろうかという、肩身の狭い思いをしながら宿舎に泊まったのですが、非常にオーラがありました」と有力選手、有名選手から大きな刺激を受けたことを明かした。

また、そのような強豪校が出走する能登駅伝に向け、地元大学では強化合宿が組まれるようになる。山口氏（一般来場者）によると「能登駅伝のコース350



写真13 山口照夫氏

キロを走るという合宿を組んだのです。朝、起きてスタートして、朝飯までに10キロから15キロ。朝飯をどこかの民宿とかで食べさせてもらって、午前中の練習で20キロ。お昼をまたどこかで食べさせてもらって、午後の練習。そして民宿に泊まって、ということで、1週間ぐらい」という

合宿が組まれたという。山口氏は「金沢にゴールした時、私は車でゴールしましたが、膝が痛くてしょうがないくらい」であった。

能登駅伝には、その次の伊勢駅伝に向けたチーム強化という位置づけもあった。立蔵氏（一般来場者）は「伊勢駅伝が正月すぎにありましたので、この駅伝も頑張っって弾みを付けようということで、一生懸命練習しました」また、当時の合宿では金沢工業大学と金沢大学、それから金沢経済大学（現：金沢星稜大学）が合同で開催していたこともあった。立蔵氏は「合宿所で皆で寝泊まりして、朝から晩



写真14 立蔵義春氏

まで一緒に練習して、普段と違う練習、そして規律ということで、ものすごく励みになったことを今でも覚えております。」と当時の様子を話した。

能登駅伝は出走ランナーのみならず、コース沿道に隣接する高等学校に在学していた高校生にも影響を与えていた。輪島市内にあった石川県立町野高等学校（現在は閉校）出身の中瀬氏（一般来場者）は「ちょうど学校の校舎から、能登半島一周駅伝の大学の選手の走っているのが見えました。3年間、学生の皆さんが能登半島一周駅伝を走っているのを見ながら、逆に言えば、この大会によって、私が陸上を目指し、駅伝を目指したのではないかなと思います。」と当時をふりかえる。町野高校卒業後、中京大学陸上部に所属した中瀬氏は大学4年次に全日本駅伝にアンカーとして出走し、区間3位という好成績を残した。「能登半島一周駅伝に育てていただいて、夢をもらって、大学でちょっと花を咲かせていただいた」と能登駅伝が自身の競技人生の大きな契機となっていることを語った。



写真15 中瀬敬夫氏

（2）指導者を育んだ大会

能登駅伝のランナーは大会後、指導者としても活躍している。

中島氏（一般来場者）は、高校時、インターハイ・チャンピオン、その後中京大学から能登駅伝に出走。大学卒業後、指導者として母校の石川県立寺井高等学校へ赴任する。全国高等学校駅伝競走大会に石川県では初の男女アベ

ック出場を果たす。また、女子は第1回大会から4年連続出場を果たしている。さらに、バルセロナ五輪で競歩に出場した板倉美紀氏を高校時代に指導している。

中島氏は能登駅伝の思いが石川県陸上界の中で後世へと伝えられていくことを期待し、「石川県では親谷先生が頑張っておられるので、星稜高校等、駅伝に何



写真16 中島敏一氏

度も出られて、後の方がずっと続いているというような状況です。何とか、その情熱を今の高校生に伝えていただいて、競技運営の苦勞を分かりながら、走ることができるありがたさを、選手が身にしみて感じながら日本一を目指してほしいと、石川県地域に期待しております」と話した。

また、前掲の中瀬氏も大学卒業後、指導者として石川へ戻り、尾山台高等学校（2018年4月から「金沢龍谷高校」に校名変更）では石川県大会を男子11連覇、全国高等学校駅伝競走大会に出場している。その間、3回の男女アベックも果たしている。中瀬氏は「この能登半島一周駅伝が、私を走ることに開花させて、大学で夢を見させていただいた。その夢を、今、子どもたちにつなげてやっております。窓越しに見た、大学生の走る姿が今でもやはりまぶたに残っており、本当に素晴らしいありがたい大会だったなと、つくづく思っております。本当にありがとうございました」と能登駅伝への感謝を述べた。

能登駅伝のランナーは、現在、大会運営者として、各地での駅伝や陸上競技の普及・推進にも貢献している。

大会当時はランナーであった平塚氏は、岐阜県飛騨市で開催されている「飛騨駅伝大会」の大会長を務めている。「昨年度までのコースが使えなくなり、単線のいわゆる駅伝コースから、今年は周回コースで同じところでグルグル回る。距離だけを少し変えるというような駅伝にせざるを得なくなりました。交通事情もいろいろな事情の中で、本当に運営することの苦しさ、難しさというものを、自分も今、感じています」と運営者となった現在の苦勞を語る。また、「能登駅伝があるまま50回というよ



写真17 表和夫氏

うな形で続いていたとしたら、化け物みたいな駅伝になっていただろう」と述べた。

また、山本太一氏（一般来場者）は大学卒業後、地元滋賀に戻った後、「琵琶湖一周駅伝の立上げ」という知事の特命を受けたという。

「なんにもない、ゼロの状態から琵琶湖一周駅伝をせえと言われたときに、どうしてええやら、全く分からない。各市町村に頭を下げて、協賛金や競技役員をお願いしました。そして、琵琶湖駅伝を立ち上げるときに一番悩んだのは、警察です。警察の交通部長に『おまえら、何を考えているんや』と、こてんぱんに怒られて。非常に難しい経験をしています。この能登半島一周駅伝が、ゼロの状態から手づくりでつくられたのは、本当に並大抵ではなかったかと思っています。』と改めて能登駅伝を高く評価した。

（3）能登スポーツツーリズムのさきがけ

能登駅伝開催当時に大学生であったランナーや学生競技役員の面々は、大学卒業後の新婚旅行や観光目的で能登の地を再来訪している。大会立上げ時に能登観光協会が意図したスポーツツーリズムは長い年月をかけ受け継がれている。当時学生競技役員であった宮脇氏は「私は、毎年のように能登を一周してきております。『波の花』とか、ああいうものもその時にもあったと、懐かしいという思いでと共に一周しております。』と述べた。

（4）能登半島へのスポーツ文化の定着

能登には現在も続く、もう一つの能登駅伝がある。2017年10月15日に第57回大会が開催された「全能登駅伝競走大会」である。輪島市～穴水町～七尾市の56.1キロを10区間でつなぐ。これは高校生の男女から一般競技者まで、地元郡市間対抗で競われる駅伝大会である。

また、能登半島の海岸線、総距離400キロメートルを3日間で一周するサイクリング大会「ツール・ド・のと400」、珠洲市中心とした「能登半島すずウルトラマラソン」（100キロの部、60キロの部を開催）、「トライアスロン珠洲大会」といった能登半島という自然資源を活用したスポーツイベントが展開されている。

山本進氏（一般来場者）は「能登半島というのは、長距離を走る種目に対して、ロケーションもいいですし、もっと良いのが、色々な地域のボランティアの方々の運営面が非常にいいのです。そういった意味で、やはりこの能登半島と能登駅伝の残した財産というのは、非常に大きいのではないかと思います。』と語った。能登駅伝は、現在も続くイベントの継続開催、スポーツツーリズム、そしてそれらを支える地域のボランティアなど、多様なスポーツ文

化を能登半島に育み、根付かせる契機となったといえるであろう。

4. 大会の暗転（能登駅伝廃止への過程）

多くの成果を残した能登駅伝。大会が廃止されていく過程では、駅伝運営の難しさも露呈した。

（1）駅伝運営の難しさ

東木氏は能登駅伝大会運営の難しさをこう語る。

「駅伝大会の運営で一番厄介なのは、一般道路を使うということです。それと役員と選手と全体が動いている。全員が選手の走って行くコースに沿って動いていく。そして全員が宿泊する。また次の日、ガーッと動いていく。そのことがすごく大変です。駅伝の運営というのは、大変なものだと、当時から感じておりました。あらかじめ、それぞれの所に審判とか関係の方々配置されていて、そこへどんどん近づいていくならいいのですが、本体が動いていくと同時に、役割を順番に済ませていくことになる。あらかじめ、そこでもう準備されて待っていてくれるわけではないので、全員がラインを引きながら、使ったお金の処理をしながら、あるいは昼飯を用意しながら、何かをしつつ、ずっと移動しながら競技会を運営していくということの大変さが、駅伝ではあります」。さらに、「何も知らない学生たちが、大集団を形作りながら、360キロを移動するという。これは、やはり駅伝の一番面白いところであるのかもしれませんが、運営の一番厄介な、一番大変な部分であるということです」。

また当時医学部生だった鎌田氏は救護車に乗り、大会を支えた思い出を語った。



写真18 鎌田栄氏

（2）運営資金難

大会競技運営もさることながら、運営を支える資金獲得の困難が大会運営に常について回る。大口のスポンサー獲得に教員が奔走し、各自治体や地元商店へは学生がアプローチをかける。それも全て大会準備作業と並行しながらである。

学生競技役員であった堀氏は「私も学生だったのですが、資金的な面で、大会前に能登半島に年4回ほど回ります。5度回った記憶もあります。各郡市へ補助金のお願い。そして、警察等への説明実施、合わせて各種の資金調達。もちろん、先生方は、大口の資金調達はされていたの

ですが、学生たちも各郡市を回って補助金をいただいたという思い出があります。」と当時をふりかえる。



写真19 堀和彦氏

また、限られた予算の中でどのような資金配分をしていくかについて、様々な努力と工夫が重ねられていた。例えば、「先導車を自衛隊に

お願いできる前の話ですが、たまたまその時分に、トヨタ自動車と交渉し、今から売り出しをかけるスプリンターという車をお願いし、試乗という形で利用をさせていただきました」と宮口氏は言う。

大会開催期間3日を含む11月下旬ごろになると、大会運営の中心を担っていた宮口氏や東木氏は体重が3～5キロは減っていたという。このような身を粉にした貢献が大会運営をギリギリの所で支えていたのである。

1973年10月6日に第四次中東戦争が勃発。これを受け10月16日に、石油輸出国機構（OPEC）6カ国が、原油公示価格を70%引き上げるとを発表した。日本の消費者物価指数は1974年に23%上昇し、「狂乱物価」となった。インフレ抑制のために公定歩合の引き上げが行われ、企業の設備投資などを抑制する政策がとられた。結果、1974年はマイナス1.2%という戦後初めてのマイナス成長となり、高度経済成長が終焉を迎えた。能登駅伝大会が第7回目を迎えた年である。

このような経済状況下で、能登駅伝大会の懸命な努力と工夫にも限界があり、その後も資金獲得は難しい局面に入っていく。主催者であった読売新聞社に代わって、地元新聞社からのバックアップの申し出の声が上がったものの、全国都市部の大学にとって、全国紙から地方紙へのマスコミ掲載価値の低下への懸念から、これは却下されたという。また、別の財団から大会補助の話が浮上するものの、日本陸連からNGが入るなどの状態が続く、能登駅伝大会はいよいよ運営資金面での困窮を極めていくことになる。

（3）事故の発生

駅伝大会は一般道路を使う。そこで、最も懸念されるのが事故の発生である。

東木氏は、「交通事故がないことが何よりも最優先されることでした。事故があったら大会は中止だということを肝に銘じてやれと、毎回必ずそれをお互いに伝達しながらやっていた」と言う。そこには当然、警察からの指導も入

る。「警察とどのように話を進め、どのように警備し、選手の安全を計りながら、道路を使っていくかということが一番の大事な問題です。そこがクリアできれば、駅伝は成功する。」と東木氏は力説する。

当時学生であり、後に警察官となった半田氏（一般来場者）は「警察も車と選手がぶつかった、ということは絶対に起こしてはならないというプレッシャー



写真20 半田宗義氏

があるものですから、信号のある交差点とかは信号を全部点滅に切り替えるのです。それでもやはり車が突っ込んでこないか、選手が突っ込んでこないかと、色々とプレッシャーがあります。やっぱり警察もそういうことがあるものですから、皆さんに対しても厳しいことを言ってくると思います」と警察サイドの事情を話した。

前述のとおり、能登駅伝は学生主体の「手づくりの駅伝」である。自衛隊への協力要請がかなわず、学生運転のレンタカーで代替措置が取られた年があった。当時実際に運転手を務めた山口氏（一般来場者）は、「入学して、9月に免許を取得して、11月ですか。まだ若葉マークを付けて走っている状況で、今、考えてみると、とんでもないことを3日間やったのだな。今でこそ、アスファルトになって広い道になっていますが、当時は砂利道で、恐らくコースの3分の1ぐらいは砂利の狭い道を走ったのではないかと、加えて、雨が降ったりみぞれが降ったり、考えてみると本当に恐ろしいことをやってのけていたのだと思います。」とリスク管理上ギリギリの運営がなされたことを明かした。

第10回大会（1977年）の際、ついに恐れていた事故が発生したという。七尾市内である大学の学生マネージャーが車から落ちてケガをした。シンポジウムにおいては簡単にその事実のみに触れた発言がなされた。それまで資金的にも大会運営についても関係者の涙ぐましい努力で辛うじて運営されてきた能登駅伝であったが、事故の発生は、そのぎりぎりの天びん秤の均衡を大きくくずし、大会運営継続にネガティブな要素となったことは間違いないだろう。

（4）地域に根ざし支えられる大会

能登駅伝にランナーとして参加した草間氏は、現在は郷里宮城県において、宮城県陸上協会の普及委員を務めている。「地元、地域に根ざした大会でなければ、5年後、10

年後に場所が変わってなくなってしまう危険性がある。地元の実業団チームのない地域に、実業団の駅伝を持ってきたからといって、地域に根ざすことはない。根っこは生えないと思います。大学駅伝においても、(2011年の東日本大震災)震災復興といった名目で開催しても、その地に根づかなければ、何の意味もない駅伝になってしまう」と、地域に根ざした駅伝大会の重要性を指摘する。さらに、草間氏は「今回、金沢でこのようなシンポジウムの開催ができるのは、能登駅伝に関わってきた人たちの思いがしっかりと伝わってきているからなのかなと思います。今日はいい勉強をさせてもらいました」と述べた。

5. 宮口氏によるまとめ

宮口氏は、「もしも開催が継続していれば、第52回大会になろうと思います。10回で終わっておりますが、52回までいろいろな都合で進められませんでした。今、思えば、金沢大学が石川城内にあった時に、城内、坂を上がって、坂の右側、体育館があって、予選会を体育館の前から、『よーい、どん』でスタートした。それが、1回目の予選会の抽選会だったような感じがします。よく考えてみると、一番楽な人は選手やったなと思います。楽で大会を楽しんだのは、選手であったなと思います。毎年、11月の下旬になると3日間、運営関係者は5キロぐらいやつれて



写真21 当時のポスターに見入る参加者

いる。大変なことです。今年が50回忌という言葉がありますが、次の大会がいつ開かれるののかなということを楽しみと同時に、苦しみに思っております。何はともあれ苦勞しながら361キロ、延べ競技役員が600名。そういった人たちの協力を得て、無事、10回まで終えられたことを喜んでおります。同時に、感謝しております。ありがとうございました」とシンポジウムを締めくくった。

6. 主催者代表閉会挨拶

大久保は主催者を代表し、「現在能登駅伝研究を続けており、第1回から第10回大会までがまもなく論文化されます。それを書籍化し、出版にこぎつけようと考えております。今日、教えていただいた資料や、他にもご指摘がありましたら、ぜひ私どものほうにお教えいただければ大変ありがたいと思います。1960年代の後半から10年続けた、貴重な能登駅伝は、スポーツ史的にも、日本でも貴重な大会だったと思います。地元の人にそれをできるだけ読んでいただきたいと思いますので、より良い出版になりますように皆さまのご協力をお願いしたいと思います。本日はありがとうございました。」と感謝の意を伝え、会を閉じた。

附言

本シンポジウム報告は、当日の録音をテープ起こし(文字化)して、簡単な項目ごとに原文の趣旨を損なわないと判断される程度に再構成した記録である。シンポジウムには共同研究者全員が何らかの形で加わっているが、このテープ起こしから再構成に至るまで、労をいとわずその任に当たった者は西村貴之であることを明記しておきたい。なお、本稿及び本研究に関する最終的な責任は代表である大久保が負うものである。ご批判、ご叱正を賜りたい。また本稿は『金沢星稜大学総合研究所年報』第8号(2018年5月)5-10頁に加筆修正したものである。なお、本研究は金沢星稜大学共同研究費(平成28・29・30年度)の研究助成を受けている。

注及び引用参考文献

- (1) 大久保英哲・親谷均二「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程—第1回開催(1968)から第10回大会(1977)に至るまで—」金沢星稜大学人間科学研究第9巻1号, 2015, 41-49頁
- (2) 大久保英哲・親谷均二・北川潔「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の研究(2)—第1・2・3回大会の概要と競技記録—」金沢星稜大学人間科学研究第9巻2号, 2016, 47-56
- (3) 大久保英哲・親谷均二・北川潔「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の研究(3)—第4回大会の概要と競技記録—」金沢星稜大学人間科学研究第10巻1号, 2017,

31-38頁

- (4) 大久保英哲・親谷均二・北川潔・櫻井貴志・西村貴之・佐々木達也・阿羅功也「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の研究(4)—第5・6・7回大会の概要と競技記録—」金沢星稜大学人間科学研究第10巻2号, 2017, 67-75頁
- (5) 大久保英哲・親谷均二・北川潔・櫻井貴志・西村貴之・佐々木達也・阿羅功也「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の研究(5)—第8回大会の概要と競技記録—」金沢星稜大学人間科学研究第11巻1号, 2017, 37-42頁
- (6) 大久保英哲・親谷均二・北川潔・櫻井貴志・西村貴之・佐々木達也・阿羅功也「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の研究(6)—第9・10回大会の概要と競技記録—」金沢星稜大学人間科学研究第11巻2号, 2017, 89-96頁